

震災対策学びに来日 横浜で講演も

ネパールの准教授



ネパールの被害状況について説明する
バジャチャリヤ准教授（横浜市で）

地震で大きな被害を受けたネパールから、日本の震災対策を学ぶためネパール国立トリブバン大のバジャチャリヤ・スシル・パハドゥル准教授(49)が来日している。同大と交流協定を結ぶ東京都大の招きで、同大横浜キャンパス（横浜市都筑区）でネパールの被害状況について講演も開いた。「世界有数の震災大国である日本で研修し、母国の対策に生かしたい」と話している。

ネパールでは4月の地震で約9000人が亡くなり、多くの建物が倒壊などの被害を受けた。首都カトマンズで暮らすバジャチャリヤ准教授も、家族は無事だったものの親戚が亡くなった。

震災後、建築環境が専門のバジャチャリヤ准教授は、他の教員や学生と大学建物の安全性を調査したり、自身が設計した劇場や住宅の被害状況を確認したりした。ネパールでは違法建築が少なくないという、今回の地震を契機に、トリブバン大に耐震建築を学ぶコースを新設するため、今月11日に来日。19日まで滞在する。

建物の免震構造や避難所の仕組みなどを学んだ。地震発生時の日本とネパールの対応の違いについて、日本では建物が頑丈なことを前提に机の下などに入るのに対し、ネパールは倒壊に巻き込まれないようにすぐに外に逃げるという。バジャチャリヤ准教授は「学んだことを大学にしっかりと伝えるとともに、震災被害を防ぐための政策立案にも役立てたい」と意気込んでいる。

東京都大は2012年にトリブバン大と国際交流協定を締結。今年5月に横浜キャンパスの環境学部の准教授2人をネパールに派遣し、現地調査を行った。

■この記事・写真等は読売新聞社の許諾を得て転載しています。
無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。